— collection 7 —

此春寮旧蔵リード・オルガン

リード・オルガンとは、足踏み式ペダルで起こした風力を動力として音色を奏でる楽器である。現代ではリード・オルガンそのものに文化財としての価値が有り、博物館や教会でなじみのある方もおられるかもしれない。現在、大学構内でもハリス理化学館同志社ギャラリー1階常設展示室「同志社のあゆみ」に2台のリード・オルガンを展示しており、自由に鑑賞していただけるようになっている。いずれのオルガンも2016年に大学に移管されたが、2台ともかつては別々の学生寮で利用・保管されていた。1台は此春寮、もう1台は壮図寮である。いずれの寮もかつては神学部専用の学生寮であった。今回はこのうち、此春寮

旧蔵オルガンを紹介したい。なお、オルガンの製造年の調査等については浜松市楽器博物館学芸員梅田徹氏から多大のご協力とご教示をいただいたことを明記しておく。

さて、此春寮旧蔵のオルガンであるが、その体裁から明らかに相当経年していること、そして、ストップ上部の刻印から、アメリカのメイソン・アンド・ハムリン社(Mason & Hamlin)で製造されたことがわかる。しかし、現在、同社が公表している製造番号の参照表では製造年はわからない。ただし、推測するヒントがある。ストップの左右に刻印があり、この刻印を年代順に並べるとPARIS, 1876, VIENNA, 1873, PHILA., 1876, PARIS, 1878, SWEDEN, 1878, MILAN, 1881, となる。梅田氏によると、この刻印は同社がパリやウィーンの万国博覧会などで受賞したメダルを示している。さらに、浜松市立楽器博物館ご所蔵の同社製オルガン（製造年不明）には、この6つの刻印以外に、1883年のアムステルダム国際展示会と1885年のロンドン万国発明品博覧会での受賞メダルが刻まれているとのことである。こうした事実から、此春寮旧蔵オルガンは1881年から1883年に製造された可能性が高いと考えられる。仮にこの間に製造され、学内に設置されたとなれば、此春寮開寮の1940年よりも前、すなわち此春寮の前身である西寮と呼ばれていたころ、あるいはそれ以前の学生寮に設置されていた可能性がある。詳細は不明だが、長期にわたり同志社のキリスト教主義にかかわり、長く学生寮で継承されてきた固有の価値を感じさせるのが、この此春寮旧蔵のオルガンである。

同志社社史資料センター